

な

ご

み

っ

う

し

ん

発行日：平成30年2月26日（第38号）

発行：島田療育センターはちおうじ

2011年（平成23年）4月1日に、島田療育センターはちおうじは歩みを始めました。それは、東日本大震災の年でした。1年後、あくりるたわしの活動を手伝うことができ、相馬と私の物語が始まりました（6）。そんな物語を紹介します。

所長 小沢 浩

（6）タンポポ

外では、「どんこ隊」による「どんこ汁」が配られた。相馬の漁師や魚の仲買人などを中心とした20代から30代の有志の人たちが、心をこめてふるまった「どんこ汁」。

「どんこ」（鈍子）は別名エソアイナメ。「どんこ」の肝も入ったつみれ、「どんこボール」はとにかく美味。

震災前までは「どんこ」は相馬の特産であった。震災後、今も相馬の海では漁が出来ない（2013年当時、現在は漁は行われています）。漁が出来るまで何もしないで待っているのではなく、今は加工の技術を磨いておこう。そして、相馬の名物「どんこ汁」を全国に広めていこうと。今、原材料は北海道や青森から仕入れている。

「どんこ隊」のメンバーは、コンサートの間、みんなにふるまうためにずっと準備していた。そして、用意した250杯の「どんこ汁」はあっという間になくなった。

どんな困難な状況でも、元気で前向きで相馬の未来を真剣に考えている「どん

隊」。みんな力が漲ってキラキラしていた。そんな心の調味料がいっぱい入った「どんこ汁」。「どんこ汁」を食べ、そのおいしさにみんな自然と笑みがこぼれた。

「震災があってもなくても真剣に生きていくことに変わりはないです。」

「どんこ隊」の言葉である。夜はみんなで宴会。心のハーモニーを奏でたみんなの宴会は一人づつつながり、大きな輪となった。

会の最後には、Be in Voicesのメンバーから、コンサートに参加できなかった「どんこ隊」のメンバーのためにと「ふるさと相馬」が歌われた。

翌日には、編み手の皆さんとの交流会。用意したあくりるたわし300はすぐ売れて、楽しいひとときはあっという間に過ぎていった。

「我々が、相馬で歌うことに何の意味があるのか。被災されて、苦労している人々を前にして、我々が歌って何ができるのか。申し訳ない気持ちもあった。でも、今相馬に来て、本当に良かったと思

った。素敵な出会いをありがとうございました。」

リーダーの泉かずしげさんが、交流会のあいさつで語っていた言葉である。

最後の集合写真。9人の応援団から始まったこの活動は、1年で着実に歩みを進め、大きな「輪」が広がっている。Be in Voices のオリジナル曲には、「タンポポ」という曲がある。

その「タンポポ」を聴いて想いだした。相馬を初めて訪れたとき、枯れた大地にポツンと咲いていた「タンポポ」を……。



「タンポポ」

作詞：小山和之、作曲：大内義昭、
編曲：泉かずしげ（CDタイトル：Ms. シンデレラ、by K style music）

かわいた街でたくましい タンポポを見たく
きみのように強く 生きてみせるよ
背伸びして 大人ぶって
涙して 無理に笑って
風が吹き 空に飛んでも
右手に勇気と 左手に愛を
小さな手ににぎり ぼくらは生まれた
かすかな記憶を 思い出してみよう
生命が空にふれて 泣き出した時を
人の波で流されてゆく 涙もうそも
ともだちっていいよね 笑ってくれる
負けそうになった時も くじけそうになった

時もたえないタンポポのように
右手に勇気と 左手に愛を
小さな手ににぎり ぼくらは生まれた
野原をただよい 無数に広がって
あなたと季節を乗り越え 雲が消えてく
誰もが一度は 暗い闇の中
光を探して 迷いはするけど
いつしか信じた 魔法の絨毯は
時空のかなたへと ぼくの夢のせて飛んでく

「本当に相馬に行ってよかった。悩んで立ち止まるより、一步を踏み出す。このことが大切だと感じた。」

この言葉もリーダーの泉かずしげさんが、語っていた言葉である。

「一步を踏み出す」
それは、今の我々に欠けているもの。
相馬の人たちは、みんな踏み出している。
支援してもらっているのは、本当は私たちなのかもしれない。

その感謝の気持ちを伝えるためにも、私たちはこれからも活動を続けていく。



『奇跡がくれた宝物』
小沢浩 著

クリエイツかもがわ
より発売中